

近代の国づくり（1867～1900） その13

《「川崎を 汽車で通るや 梨の花」・・正岡子規》

正岡子規（生没年：1867－1902年）は、川崎大師へ参ったとき「川崎を 汽車で通るや 梨の花」と詠んでいます。子規は、すでに不治の病だった結核になっていましたから、それを念頭に読み返すと、非常に余韻が残る仕上がりとなっています。（注1）

さて、子規が俳句に詠むほど、多摩川下流の川崎市や大田区は、江戸時代から梨の産地でした。多摩川の河川敷が、梨栽培に適していたからです。1864年（嘉永7）の安政の大津波で壊滅的な被害を受けましたが復活します。

そして、1893年（明治26）、川崎市大師河原（現川崎区日出町）の梨園で、「長十郎梨」（注2）が発見されます。この長十郎は、病気強く、瞬く間に栽培域を多摩川中流域まで広げました。（注3）

なお、1893年（明治26）は、多摩川中上流域の多摩地域が、神奈川県から東京府に編入された年でもあります。

注1：1894年（明治27）には、日清戦争が起こり、子規は、従軍記者として中国にわたりますが、これが結核を重くし、以降、病床に伏すことになりました。

注2：「長十郎梨」は、「幸水」や「豊水」など赤梨系の祖先です。一方、青梨系の「二十世紀梨」は、「長十郎梨」に若干遅れて千葉県松戸市で見出され、鳥取県で広まりました。

注3：多摩川下流の梨畑は、大正時代から始まる直轄改修により激減し、また工場用地となって、姿を消しました。そこで、発祥の川崎区に長十郎梨を復活させようと、2005年（平成17）、俳優の中本賢氏により、多摩区農家から提供された長十郎梨の苗が大八車に乗せられ、二ヶ領せせらぎ館（国土交通省京浜河川事務所宿河原堰管理所）から、川崎区若宮八幡宮に運びこまれ、植樹されました。若宮八幡宮は、わが国の治水王、仁徳天皇が祭神。境内には金山神社があり、その奇祭「かなまら祭」は外国人観光客で賑わいます。

参考：江戸時代の俳人松尾芭蕉は、川崎宿で、「麦の穂を たよりにつかむ 別れかな」と詠んでいて、句碑が、京浜急行八丁畷駅のところにあります。

写真は、①長十郎梨のふるさと看板（六郷橋直下流右岸、インターネット川崎ガイド、フリー写真集より）、②長十郎梨が植栽された若宮八幡宮境内にある金山神社（細見撮影）

①



②

